

2024年度～2033年度

広島教区の宣教司牧目標の解説

ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう

[2020教区代表者会議]の提言を受けて

広島教区では、第3回目の「2020教区代表者会議」を通して、教区創立100周年（2023年）以降の、教区の長期および中期の宣教司牧目標を決定しました。2024年度から、その新たな歩みが始まっています。

2024年度～2033年度までの教区の長期および中期の宣教司牧目標をよりよく理解するため、2022年の復活祭に出された「司教教書」、および2024年4月14日に発行された広島教区報（136号）からのメッセージを、一部修正して紹介します。

I－「司教教書」（2020年復活祭）から

第1回「教区代表者会議」（2005年）に遡って、これまでの宣教司牧目標の変遷を、簡単に辿ってみたいと思います。

1－第1回と第2回の教区代表者会議

第1回「教区代表者会議」（2005年）の提言を受けて、その翌年に公布された「司教宣言」（2006年）の中で、当時の三末篤實司教は、「平和の使徒となろう」という目標を、教区の固有の召命とすることを宣言されました。同時に、それを実現していくため、「平和」、「きょうどう」、「養成」を「3つの柱」と位置づけ、4つの推進チームを立ち上げて、さまざまな取り組みを始めました。また、その5年後2010年に、広島教区は「きょうどう～神さまの呼びかけにこたえて」をテーマに、第2回「教区代表者会議」を開催しています。そして、そのまとめとして「平和の使徒になあ～れ！」¹という、新ガイドライン（2012年）を作成し、「平和」、「きょうどう」、「養成」、「多文化共生」という4つの分野ごとに、3つの標語（キャッチフレーズ）を提示しています²。その全体像を示す部分を、以下に抜粋します。

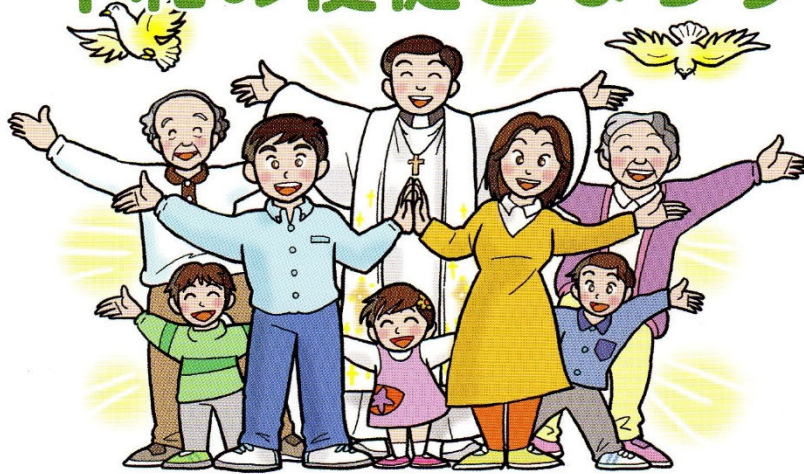
¹ 『平和の使徒になあ～れ！』カトリック広島司教区 平和の使徒推進本部 編（2012年）1頁

² 『平和の使徒になあ～れ！』カトリック広島司教区 平和の使徒推進本部 編（2012年）2頁

広島教区宣教司牧活動のしくみ

2006 年の司教宣言

平和の使徒となろう



平和の使徒となるための3つの柱

平和



主の平和の
働き手となろう

きょうどう



個人・組織・グループの
垣根を超えよう

養成



キリストに
向かって成長
しよう

3つの柱への取り組みをすすめる

4つの推進チーム

- ① 平和推進チーム
- ② きょうどう推進チーム
- ③ 養成推進チーム
- ④ 多文化共生推進チーム

推進チームは教区レベル、地区・ブロックレベル、小教区レベルで活動します。





ガイドライン

わたしたちにできることはなに？

～『平和の使徒となろう』を実践に移すために～

このガイドラインは、三末篤實司教の命を受け、2005 年の「広島教区代表者会議」において出されたさまざまな意見を集約して作成され、2006 年復活祭の日、宣教司牧に関する司教宣言を受けた後、2010 年の「2010 広島教区代表者会議」において前回からの 5 年の歩みを振り返って分析され評価されたのちに改定されました。

これは、現状を確認また共有し、これからの広島教区の福音宣教活動の方向性を見直し、司教宣言を更に実践していくためのガイドラインです。このガイドラインのそれぞれの取り組み内容を、簡単なことばで表現して以下の表にまとめましたので、キャッチフレーズとして活用してみましょう。

		1	2	3
	平和	いのちを尊び	平和の波を	日々実践
	きょうどう	互いに受け入れ合い	協力一致	新たな一歩
	養成	育て合う信仰	ミサを大切に	みことばが源泉
	多文化共生	違いを超えて	共同体を豊かに	暮らしやすい社会

各地区においては、このガイドラインをもとに、各地区レベルの方向性を確認、検討し、具体的に取り組んでいただければ幸いです。

また各教会においては、各教会特有のさまざまな課題に前向きに取り組んでいくためのヒントにさせていただくことを願っております。

これは、2006 司教宣言『平和の使徒となろう』において示された、「これからの広島教区における福音宣教と司牧の具体的な方向性」を実践に結びつけていくための「大切な内容」です。

私たち教区民一人ひとりが、「平和の使徒となろう」を合言葉に、神さまから与えられた使命を祈りのうちに忠実に果たしていくことができますように。



以降は、「平和」「きょうどう」「養成」「多文化共生」について、それぞれの取り組みの実践内容です。

2024年度～2033年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

2－教区創立90周年

第2回「教区代表者会議」から3年後の2013年（教区創立90周年）に、前任者の前田万葉司教（当時）によって、「チャレンジ新しい福音宣教—わたしをお使いください—」という10年間の長期の、そのもとに3年毎の短期の宣教司牧目標が提示され、また、2023年度には、「わたしの召命」というテーマで創立100周年を迎えるという教区の宣教司牧の方向性が示されました。そして、4つの優先課題に取り組むことも決定されています。それらを整理すると、以下のようになります。

①長期（10年間）の目標

2013年～2023年（教区創立100周年）まで
「チャレンジ新しい福音宣教～わたしをお使いください～」

②中期（3年ごと）の目標および1年毎のサブテーマ

2014年度～2016年度「家庭へのチャレンジ」（サブテーマなし）³
2017年度～2019年度「教会へのチャレンジ」：預言職・祭司職・王職
2020年度～2022年度「社会へのチャレンジ」：いのち・環境・平和
2023年度（創立100周年）「わたしの召命」

③優先課題

「青少年の育成」・「召命促進」
「津和野の証し人の列聖」・「教区共通の要理書の作成」

3－教区全体の目標や課題の枠組み

従来からの教区全体の宣教司牧の目標や課題の枠組みを踏襲しながら、第3回「教区代表者会議」（＝2020教区代表者会議）の「福音宣教」分科会からの提言⁴を活かして、2024年度～2033年度（教区創立110年）までの10年間の目標や課題を、以下のように設定することにします。

①教会の普遍的な「三重の使命」（宣教活動・典礼活動・司牧活動）

主イエス・キリストが、弟子たちに託した使命に対応している教会の普遍的な三重の使命をいつも念頭に置き、そこへ向かうものとして教区の目標や課題を提示します。

³ 1年毎のサブテーマについては、平和の使徒推進本部の要請を受けて、2017年度より追加されたものである。

⁴ 「福音宣教」分科会の標語①—提言参照。

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

- 1) 宣教活動（預言職）—福音を宣教する使命
「全世界に行って……福音を宣べ伝えなさい」（マルコ 16・15）。
「すべての民をわたしの弟子にきなさい」（マタイ 28・19）。
- 2) 典礼活動（祭司職）—神の恵みを祈り授ける使命
「父と子と聖霊の名によって洗礼を受け（なさい）」（マタイ 28・19）。
「わたしの記念としてこのように行ないなさい」（ルカ 22・19）。
「わたしの名によって父に願（いなさい）」（ヨハネ 15・16）。
- 3) 司牧活動（王職・牧職）—隣人に奉仕する使命
「互いに愛し合いなさい」（ヨハネ 13・14）。
「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイ 22・39）。

②教区固有の召命（2006年の「司教宣言」による提示）

「平和の使徒となろう」という目標は、広島教区にとって永続的なものです。

③10年間の宣教司牧の目標

「福音宣教」分科会からの提言⁵と、2023年に開催される第16回世界代表司教会議の「ともに歩む教会のため—交わり、参加、そして宣教」というテーマを活かし、2024年度～2033年度までの宣教司牧の目標を、「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」とします。「あたたかさ」⁶とは、キリストがその生涯と死をもってあかしされ、わたしたちにも注がれ続けている神の愛といつくしみ（Iヨハネ 4・7～21）を意味します。教区創立100周年を機会に、まず、神の「あたたかさ」を身に帯びることの大切を認識したいと思います。そして、信仰に基づく「あたたかさ」の源泉に立ち帰り、「あたたかさ」を育む共同体をつくり、「あたたかさ」を隣人、家庭、社会、自然界⁷へと広げる教会を築いて行くことをめざしましょう。

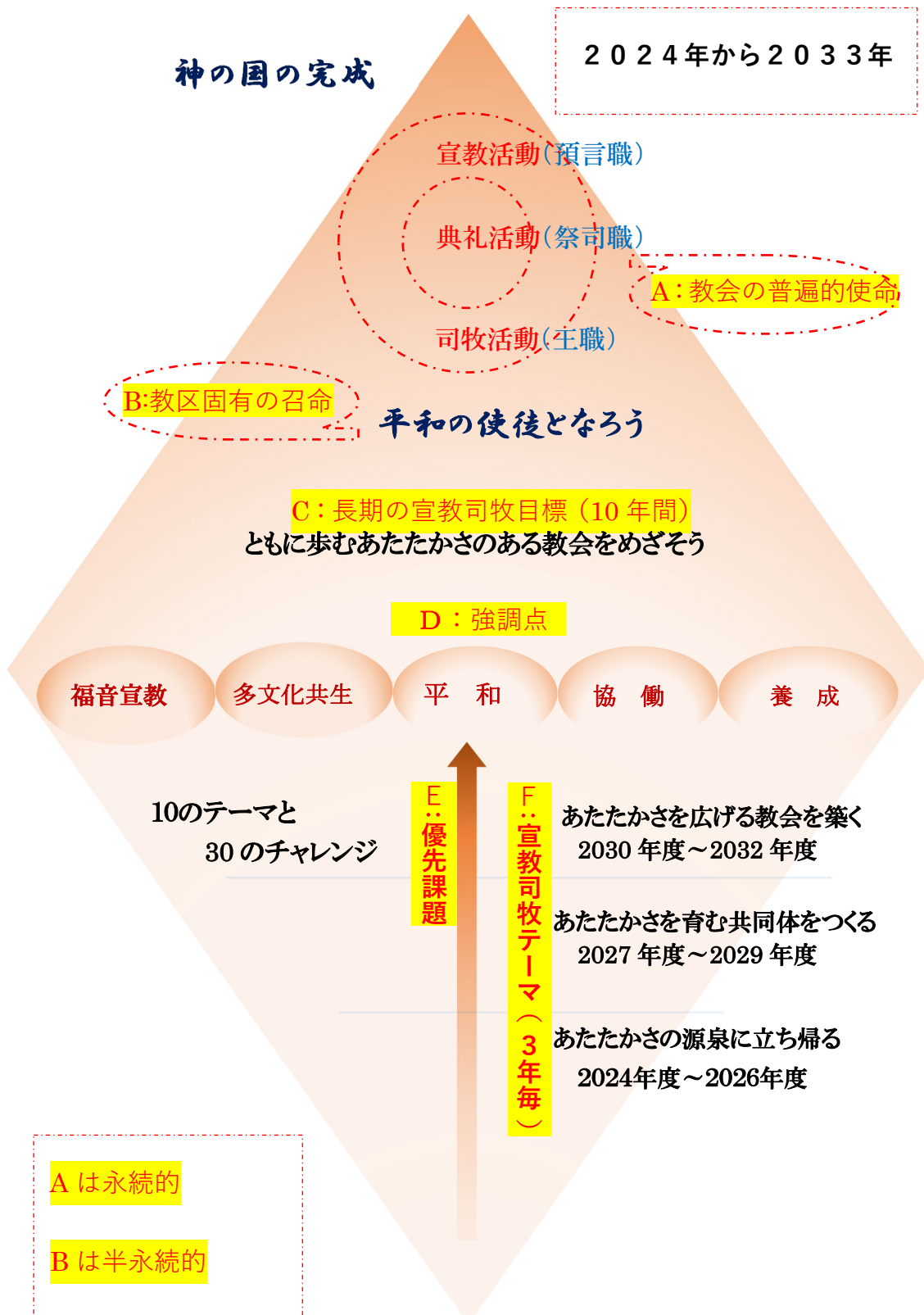
この目標は、教皇フランシスコがその回勅『兄弟の皆さん』（2020年10月3日公布）で呼び覚ますように強調された兄弟姉妹への愛と社会的な友愛、また、回勅『ラウダート・シ』（2015年5月24日公布）で取り扱われた環境問題、それに関連する社会問題への取り組み、そして、「すべてのいのちを守るため」というモチーフで訪日された（2020年11月23日～26日）教皇フランシスコのメッセージに呼応するものでもあります。

⁵ 「福音宣教」分科会の標語①—提言参照。

⁶ 「平和」分科会の標語②—提言、教皇フランシスコ回勅『兄弟の皆さん』222～224（優しさを取り戻す）参照。

⁷ 「平和」分科会の標語②—提言参照。

2024年度～2033年度
広島教区の宣教司牧目標の解説



2024年度～2033年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

④3つの「柱」を5つの「強調点」へ

上記10年間の目標実現のために、教区として力を入れて行く重要なポイントという意味で、従来の「柱」を時代の要請に応じて変更が可能な「強調点」に変更します。2024年度～2033年度の目標を支える強調点は、今回の教区シノドスの分科会のテーマをそのまま活かして、5つとします。

⑤中期の目標（3年ごと）

従来の枠組みを活かして、中期のテーマを、以下のように設定します。

- 2024年度～2026年度 「あたたかさの源泉に立ち帰る」（典礼活動）
- 2027年度～2029年度 「あたたかさを育む共同体をつくる」（司牧活動）
- 2030年度～2032年度 「あたたかさを広げる教会を築く」（宣教活動）
- 2033年度（創立110年）「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」

⑥1年毎のサブテーマ

社会情勢に基づく「時のしるし」を読み取りながら、必要に応じて、小教区ごとに1年毎のサブテーマを決定していただきたいと思います。

⑦優先課題

今後10年間にチャレンジしていく優先課題をよりよく識別して取り組むことができるよう、従来の4つの優先課題を残しつつ、第3回の教区シノドスの提言を「10のテーマ・30のチャレンジ」（→8を参照）として打ち出されました。

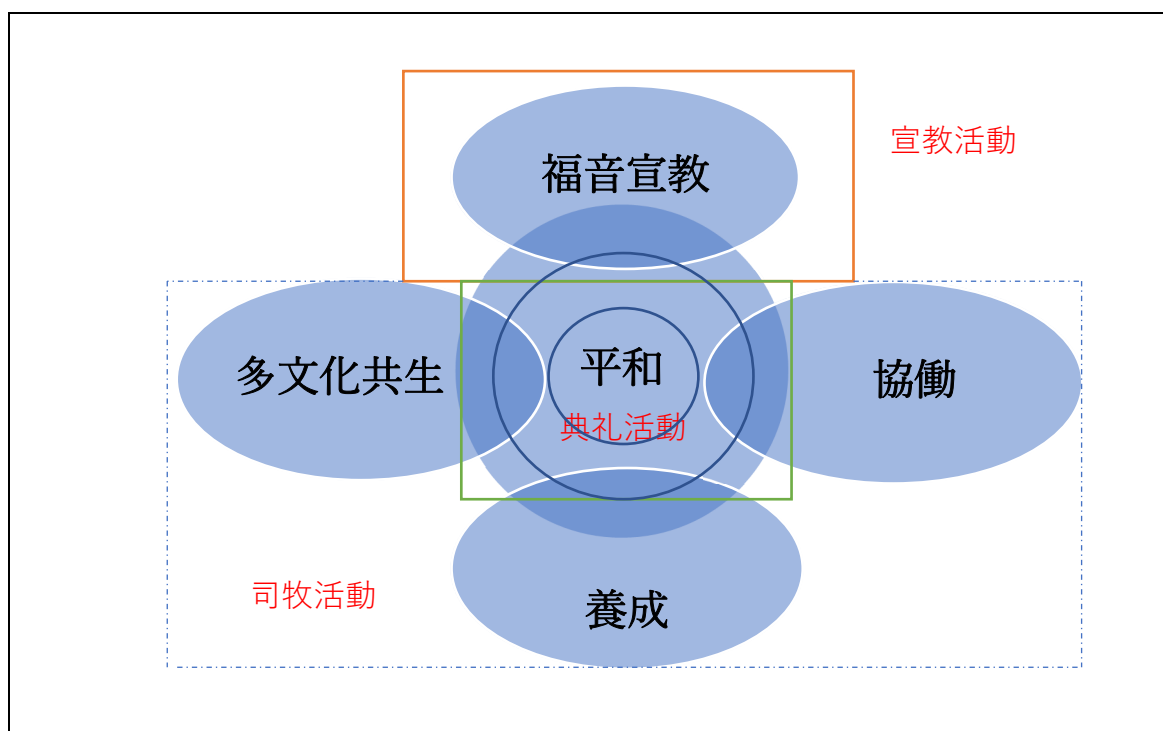
4－中間の振り返りと第4回目の教区代表者会議

教区創立110周年（2033年度）を迎える前の2032年度を目処に、第4回目の教区代表者会議を開催して、2034年度以降の教区の歩みを、ともに考えます。また、それまでの間にも、「教区シノドス」後の歩みの振り返りや提言推進の進捗状況を評価するために、小規模な会議（「教区ひろば」）を企画します。

5－5つの強調点の関連性

今回の5つの分科会からの提言を活かして、今後の優先課題を具体化していくために、まず「平和」、「福音宣教」、「多文化共生」、「協働」、「養成」という5つの「強調点」の関連性を理解しておくことが大切です。その説明のために、以下のような図式化できるのではないかと思います。鳩が羽ばたくイメージで、「平和」を胴体（心臓）、「福音宣教」を頭とくちばし、「多文化共生」・「協働」を両翼、「養成」を尾翼に喩えています。

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説



①「平和」

〔平和の源泉〕—「平和」分科会から「教会の平和活動は、信仰から出てくる」⁸ものであり、平和の霊性を大切にすることが提言されています。教会が取り組むさまざまな平和活動そのものは、図式の中央部にある「平和」の外周部に位置づけられますが、わたしたちはその「平和」の中円・内円に相当する部分、つまり、信仰に基づく平和の源泉（心臓部）に目を向けることが重要です。

復活の日の夕方、集まっていた弟子たちの真ん中に立たれたイエスが「あなたがたに平和があるように」と言われて、その手とわき腹を見せたとき、「弟子たちは、主を見て喜び」（ヨハネ 20・20）しました。イエスは重ねて言われました。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」（ヨハネ 20・21）。そして、イエスは弟子たちに息を吹きかけ、聖霊を注がれました。

教皇フランシスコは、使徒的勧告『福音の喜び』の中で、「復活したキリストの心からわき出る聖霊に結ばれ」⁹て、「すべてのキリスト者に、どのような場や状況にあっても、今この瞬間、イエス・キリストとの人格的な出会いを新たにしよう呼びかけ」¹⁰ています。広島教区の「平和の使徒となろう」という教区固有の召命の源泉も、弟子たちの真ん中に立ち、聖霊を注いで、「あなたがたに平和があるように」、そして「あなたがたを遣わす」と仰せになった主イエスとの人格的な出会いがあることを確認したいと思います。

⁸ 「平和」分科会の標語②—提言参照。

⁹ 教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』カトリック中央協議会（2014年）10項。

¹⁰ 同上。

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

復活された主イエスは、手やわき腹に傷を負っていました。それは受難の時の傷であると同時に、世の終わりに至るまで、人類が主イエスに負わせる罪の傷でもあります¹¹。主イエスは、すべての人の罪をゆるし、回心に導いて、まことの平和へ導くために、今もキリスト者を聖霊によって強め、「平和の使徒」として派遣されます。キリスト者は聖霊によるキリストの平和の恵みをいただき、それを隣人に、家庭に、教会に、社会に、そして自然界に広げていく使命を帯びています。

〔初代教会のキリスト者の模範〕—使徒言行録の中に、次のように記述されています。

「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。…信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、皆がそれを分かち合った。そして毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして主は救われる人々を日々仲間に加えて一つにされたのである」(使 2・41～47)。

復活された主イエスとの人格的な出会いによってもたらされる平和と喜びを呼び覚ますために、教会共同体は「ゆだねられた神のみことばという聖なる遺産を守り、粘り強く、使徒たちの教え、兄弟愛の交わり、パンを裂くこと、祈りをたえず保つ」¹²ように心がけてきました。わたしたちも、初代教会のキリスト者からの信仰の遺産と、その模範を心に留めて、そこに立ち帰ることを新たな歩みの原点にしたいと思います¹³。

〔平和の恵みを注ぐ典礼〕—第二バチカン公会議は、「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉である」(『典礼憲章』10)と教えています。復活された主イエスとの出会いの最高の場は典礼、とくに感謝の祭儀(ミサ)です。したがって、あらゆる恵みの源泉である典礼活動(祭司職)を、図式化した「平和」の内円(ミサ)と中円(諸秘跡)に重ねて考えることができます。そして、そこから波及するキリストの平和の恵みを広げる外周部は、宣教活動(預言職)や司牧活動(王職)につながって行くことと理解することができます。洗礼・堅信の秘跡による聖霊の恵みを基礎とし、パンを裂くこと(ミサ)と祈ることを通して、主イエスに出会う平和と喜びのうちに深くとどまることが、教会活動の原動力であるという認識を共有したいと思います。

¹¹ 『カトリック教会のカテキズム』(カトリック中央協議会) 598、623 項参照。

¹² 第 16 回通常総会準備文書 13、使 2・41～47 参照。

¹³ 「福音宣教」分科会の標語①—提言参照。

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

②「福音宣教」

復活された主イエスとの出会いによる平和と喜びは、キリスト者の心を、自然に福音宣教へと駆り立てます。それは「全世界に行って、すべての造られた者に福音をのべ伝えなさい」（マルコ 16・15）というイエスの命令でもあるからです。教会は、主イエスのこの命令を遂行する宣教活動（預言職）を優先的な使命に位置づけていますが、この福音宣教の務めをよりよく果たしていくために、教皇フランシスコが使徒的勧告『福音の喜び』（14）の中で、以下のように、宣教の対象を三つの領域に区分していることに留意したいと思います。

1) 第一の領域（通常の司牧の領域）：信仰を実践している信者

- ・定期的に共同体の活動に参加し、主の日に集まって、みことばと永遠のいのちのパンで養われている信者
- ・頻繁には礼拝に参加しなくとも、強くて誠実なカトリック信仰を保ち、さまざまなかたちでそれを表す信者

2) 第二の領域：信仰を実践していない（教会から離れている）信者

- ・洗礼を受けながらも洗礼の要求することを実行していない人々。…彼らは、教会への心からの帰属感をもっていないし、もはや信仰の慰めも感じていない。
- ・「洗礼を受けながら教会から離れて、キリスト教的な生活を送っていない人々を含む」（教皇ベネディクト十六世）

3) 第三の領域：「イエス・キリストを知らない人、また拒み続けている人」

宣教の対象となるこの三つの領域の区分は、「イエスから宣教の使命へと召されているのはだれか」という問いかけであると同時に、宣教する者およびその共同体の育成に力を注ぐことの大切さを意識させてくれます。それは、現代社会のさまざまな困難や問題に直面しながらも、福音宣教の務めをたゆまず継続していくために、教会はいつも「新しい情熱、新しい方法、新しい表現」¹⁴によるチャレンジを求められているからです。今回の「ともに喜びをもって福音を伝える教会へ」という教区シノドスの総合テーマも、それを追求するためでした。イエス・キリストが人類にもたらされた神の福音をあかしし（預言職）、多くの人々を救いの恵みへと導き（祭司職）、ともに喜びをもって信仰の道を歩み続ける（牧職・王職）ことが教会の使命です。教区創立100周年を迎えるにあたり、わたしたちは、教会の普遍的な三重の使命に取り組む熱意を新たにしたいと思います。

¹⁴ 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『現代の司祭養成』（1992年）18項、教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』（2013年）11、15項参照。

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

③「多文化共生」・「協働」・「養成」

〔相互の交わり〕一初代教会のキリスト者は、使徒の教え（神の福音）を土台として、キリストのうちの一つとなるために、「相互の交わり」を育むことを大切にしていました。教会共同体が、その使命のために国籍や文化の違いを越えて（⇒多文化共生）、また異なる立場にある人々が協力して働くこと（⇒協働）、そして、その使命を持続させていくために、教会共同体に属する一人ひとりのメンバーの召命の育成（⇒養成）に力を入れていくことは極めて重要な課題です。「多文化共生」・「協働」・「養成」という分科会のテーマは、まさに教会共同体が「相互の交わり」を堅固なものとし、その共同体が持続的に使命を遂行していくための「司牧活動」（牧職・王職）に関わるものです。

6－「ともに歩む教会」をめざす

教皇フランシスコは「ともに歩む教会のためー交わり、参加、そして宣教」というテーマで、2023年10月に第16回世界代表司教会議（世界シノドス）を開催することを宣言され、その準備段階で世界のすべての教区民が参加することを望まれました。今回の教区代表者会議は、教区における世界シノドスの準備期間と重なりました。このことは、広島教区が今後の歩みを考えていく上で、有意義な体験となりました。福音宣教という目標に向かっていくため、皆が「交わり」・「参加」して「ともに歩む」という理念（シノドス性）と、教区シノドスの「多文化共生」・「協働」・「養成」という分科会のテーマには、関連性がみられるからです。世界シノドスの準備をしているわたしたちは、教皇フランシスコが強調している、この「ともに歩むこと」（シノドス性）についての理解を深め、これからの教区の歩みに生かしていく必要があります。

①教会のシノドス性の意味

世界シノドスの準備文書は、「ともに歩むこと」（シノドス性）が、「教会の王道」であり、「神が第三千年期の教会に期待しておられる歩み」であると教えています（9～10 番参照）。この「ともに歩むこと」の理解のために、準備文書の第三章に示されている聖書的なイメージが、その一つの助けになります。世界シノドスの準備文書は、主イエスを「絶対的な主人公」とし、「主に従い、霊に従順でありながら、ともに旅をする」（16）という表現を用いて、教会のシノドス性の基礎を教えています。そこに、主イエスがともに歩むように招く人々（群衆）と、その人々に奉仕するよう召された使徒たちが登場します。準備文書は、「イエス」・「群衆」・「使徒たち」という三者が、「聖霊に照らされてともに歩む」ことの大切さを教える（17～20 参照）と同時に、この三者の交わりを分離させようとする敵役（誘惑）が、聖書の中に登場することも伝えています。この敵役に惑わされないために、教会共同体には絶えず聖霊による識別が必要であり、エルサレムで行われた最初の使徒会議は、そのためであったと教えています（21～24 参照）。

世界シノドスの準備文書によれば、教会の歴史の中で第一の千年期に、教会のシノドス

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

性はよく実践されていたのに対して、第二の千年期に「教会は位階的な機能をより強調するようになった」と述べています。それにもかかわらず教会のシノドス性は保持され、第二バチカン公会議は、再び教会のシノドス性を呼び起こしてくれたことを明らかにしています（11～13 参照）。教会のシノドス性は、司牧者中心でも信徒中心でもなく、聖霊の助けのもとに、互いに心を開いて対話しながら、ともに神のみ旨を識別して（神を中心として）ともに歩むことを意味しています。

②シノドス性を活かす意志決定の方法

司牧者が神の民の声を聴くために、第二バチカン公会議後には、小教区・地区・教区の各レベルで宣教司牧評議会や教区代表者会議などの制度が設けられ、実践されてきました。しかし、世界シノドスの準備文書は、このように司牧者が神の民の声を聴くことは、「教会内で多数決の原理に基づく民主主義の力学を前提とするものではなく」（14）、神のみ旨を一緒に識別するためであると教えています。「ともに歩む」ことを実現していくために教会共同体は、しばしば意志決定をしなければなりません。その際に、「平和の使徒になあ～れ！」¹⁵という新ガイドライン（2012年）でも打ち出されていた「意志決定プロセスの三原則」を大切にしたいと思います。それは、①「絶対君主主義ではない」、②「民主主義でもない」、③聖霊の助けを願いながら、「福音に基づいて識別する」こと（福音主義）です。

【教会共同体における意思決定の方針】

①「絶対君主主義」ではない。	司牧者は、広い心で丁寧に、信徒の意見を聴く。
②「民主主義」でもない。	多数決の結果は参考にし、決定の手段としない。
③「福音に基づく識別」を大切に	司牧者と信徒との協議と合意によって決定する。
（聖霊の助けに照らされて）	過去の決定事項であっても振り返って識別する。

③教会のシノドス性の豊かさ

世界シノドスの準備文書は、教会のシノドス性が「教会会議や司教総会を開催することや、教会内部の単純な運営以上のもの」（10）であり、教会のメンバーと一緒に集まり、教会の福音化の使命に能動的に参加しながらともに歩むときに、交わりとしての教会の姿が明らかになると教えています。また、「洗礼を受けたすべての人は、多様で、秩序づけられた豊かさをもつ、それぞれのカリスマ、召命、奉仕職を実行することによって、キリストの祭司職、預言職、王職に参加し、個人としても神の民全体としても、福音化の能動的主体となる」（12）と述べています。その模範として、世界シノドスの準備文書（13）は、初代教会の信者たちが「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心」（使2・42）であり、「すべてのものを共有にし、財産や持ち物を売り、おのおの必要に応じて、皆がそれを分け合った」（使2・44～47a）ことを紹介しています。

¹⁵ 『平和の使徒になあ～れ！』カトリック広島司教区 平和の使徒推進本部 編（2012年）1頁

7- 「シノドス対応調整チーム」の設置

世界の教会がめざすシノドス性をより豊かに生きるために、そして、今回の教区シノドスの提言を推進していくために、提言内容の重要性や可能性を識別し、それらを具体化して、関係する評議機関（教区宣教司牧評議会等）に提案する必要があります。現在、広島教区においては「平和の使徒推進本部」（企画推進部）がこの役割を担っていますが、今回の教区シノドスの提言を整理し立案化していくために、「平和の使徒推進本部」の傘下に、「シノドス対応調整チーム」を設置したいと思います。

①チームの位置づけ

「シノドス対応調整チーム」は立案化を担当する役割をもつものであり、関係する評議機関（教区宣教司牧評議会等）で決議された事項を実施していく執行機関ではないことに留意したいと思います。実施を担当するのは、既存の種々の関係組織（委員会、活動団体など）です。そのために「シノドス対応調整チーム」は、立案化していく準備の段階からこれらの関係組織と連携していく必要があります。

②「ネットひろば」・「教区ひろば」の企画

「シノドス対応調整チーム」の作業をサポートしていくため、今回の分科会メンバー内外から有志を募り、分かち合いの場を広げる手段として、オンラインも活用しながら、5つ（宣教、平和、多文化、協働、養成）の「ネットひろば」を企画します。また、必要に応じて、「ネットひろば」の拡大会議となる「教区ひろば」を企画したいと思います。

8- 「10のテーマ・30のチャレンジ」

今回の教区シノドスのために設置された5つの分科会からの提言の内容は非常に豊かであり、すべてを紹介できませんが、その内容のポイントを要約して、動機・意向・目的を示す10のテーマと、関連する30のチャレンジの事例を提示します。しかし、これらは提言の要約であって、今後のノルマではありません。

〔福音宣教〕

①福音の喜びの源泉に立ち帰ろう。

- ・主日のミサへの参加と、個人の祈りや黙想の実践
- ・神のことばに親しむ（勉強会、分かち合い、聖書の通読や書き写しの推進）
- ・日々の祈り、広島教区の固有の祈り、信者の心得が掲載された冊子の発行

②新たな熱意・手段・表現をもって福音を伝えよう。

- ・「津和野の証し人の列聖」による信教の自由や家庭・共同体の役割の教化
- ・情報技術（IT）機能の整備と SNS の活用の推進
- ・教区共通の要理書の作成

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

〔平和〕

- ③信仰に基づく平和の精神を推進しよう。
- ・祈りによる平和の精神の浸透
 - ・高齢者、障がい者、青年、教会から離れている信者への配慮（傾聴と支援）
 - ・教区の歴史的な文書、平和に関する資料の収集・保存・有効活用（展示）
- ④環境問題といのちの尊厳の取り組みを積極的に進めよう。
- ・「持続可能な開発目標」（SDGs）・「ラウダート・シ・ムーブメント」の推進
 - ・戦争、原爆、とくに核兵器に反対する諸活動の支援
 - ・差別、偏見、ハラスメントをなくす学びや活動の推進

〔多文化共生〕

- ⑤ともに歩む「あたたかさ」を「形」にしよう。
- ・他国籍の人々への支援体制（外国語ミサ、信仰養成、生活支援など）の構築
 - ・多文化共生に取り組む小教区・地区・教区の担当者をつなぐ情報ネットワークの構築
 - ・他国籍のグループの諸活動の支援

〔協働〕

- ⑥「協働」の精神を深める教会組織のあり方を考えよう。
- ・協働体制を活性化（人材、財政、行事を共有）するワーキンググループの設置
 - ・小教区、地区、教区の各組織の見える化（簡素化）と、情報伝達網の改善
 - ・会議のオンライン化や事務のデジタル化の推進
- ⑦カトリック教育機関、地域社会、他教派・他宗教との連携を深めよう。
- ・カトリック教育担当チームを設けて協力体制を図る
 - ・「カリタス広島」の組織の構築による地域社会への奉仕
 - ・他教派・他宗教の研究機関・活動団体との連携

〔養成〕

- ⑧青少年の信仰養成に同伴し、それぞれの召命を開花させよう。
- ・教区練成会、中ブロ高校生大会、召命学校の充実と連携、青少年情報センターのあり方の検討
 - ・司祭、修道者の召命を促進する祈りと活動の推進（「一粒会」の普及、召命黙想会の充実）
 - ・初聖体後・受堅後の侍者奉仕や教会活動への招き、信仰教育の同伴

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

- ⑨カテキスタの養成を推進し、その役割を広げよう。
- ・カテキスタの養成コース、ロレンソ会の周知・充実
 - ・選任によるカテキスタの奉仕職の導入
 - ・種々のカトリック教育機関との連携
- ⑩司祭と信徒の生涯養成を充実させ、ともに歩む教会をめざそう。
- ・教区司祭の生涯養成（月修、研修会、黙想会、個人的な学び）の推進
 - ・大人のための教会学校（ミサ前後の短い学び、巡礼、遠足、発表会の企画）
 - ・典礼暦に基づく要理の学びの推進（「典礼と要理」のリーフレット作成）

上記の「10のテーマ・30のチャレンジ」を具体化していく上で、教皇フランシスコの回勅『兄弟の皆さん』、回勅『ラウダート・シ』、訪日の際のメッセージ『すべてのいのちを守るため 教皇フランシスコ訪日講話集』、そして日本カトリック司教団の『いのちへのまなざし』（増補改訂版）などは、カトリック教会の立場を示す貴重な指針です。

Ⅱ—広島教区報（136号—2024年4月）から

1—長期と中期の目標の関連性

2024年度から2033年度までの教区の長期目標・中期目標が「2020教区代表者会議」（第3回教区シノドス）の提案を受けて、以下のように設定されました。すでに各小教区には、これらの目標の掲示を、それぞれの方法でお願いしています。

長期目標（2024年度～2033年度）：「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」

中期目標（2024年度～2026年度）：「あたたかさの源泉に立ち帰る」（典礼活動）

（2027年度～2029年度）：「あたたかさを育む共同体をつくる」（司牧活動）

（2030年度～2033年度）：「あたたかさを広げる教会を築く」（宣教活動）

※1年ごと（短期）の目標は、必要に応じて、事情が異なる各小教区で決定する。

〔三年毎の中期目標〕

カトリック教会は、第二バチカン公会議（1962年～65年）において、公会議文書として初めて、この地上における教会のおもな使命（活動）を、預言職・祭司職・牧職という用語で説明しました。これら務めを分かり易く表現したものが、預言職→宣教活動、祭司職→典礼活動、牧職→司牧活動です。これら三つの活動は、時間と共に積み上げられていく理解ではないことに留意しましょう。この点については、中期目標の立て方が直線的であって、弱点（難点）があるのは確かです。

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

そのために、「2020 教区シノドス」後に出された司教教書（要約版）では、鳩のイメージで、くちばしと頭部（宣教活動）、心臓部分と胴体（典礼活動）、両翼と尾翼（司牧活動）というつながりで図式化していました。鳩は、それらのどの部分の働きでも停止してしまえば、飛ぶことができません。これと同じように、教会の三つの使命は、出番があってその時が来るまでは準備して待つイメージではなく、連動してつねに同時に行われなければならないもので、「三重の使命」とも言われています。別の表現を用いると、中期目標は、直線的なものではなく、三重の使命が螺旋状に絶えず連動して上昇していくイメージです。

連動してつねに同時に行われていかなければならない三重の使命でありながら、三年毎の時間的な経過の中に、それぞれの活動を位置づけられていることには弱点があるものの、教会の三つの使命の一つひとつに、丁寧にスポットライトを当てて、その関連性を考えながら、小教区、地区、教区の活動のあり方を全体として振り返っていただければ幸いです。

2－三年毎の視点

教会の三重の使命の中で、2024 年度から2026 年度の3 年間は、とくに典礼活動（祭司職）にスポットを当て、小教区、地区、教区の活動のあり方を全体として振り返る期間です。第二バチカン公会議が、最初に討議して採択した「典礼憲章」（1963 年）の中に、教会の三つの使命についての教えがあります。そのテキスト（§）を抜粋して、少し解説（⇒）を加えたいと思います。

〔祭司職〕（典礼活動）

①§「典礼はまさしくイエス・キリストの祭司職の行使と考えられるもので、典礼において、人間の聖化が感覚的なしるしによって示され、それぞれのしるしに固有なしかたで実現される」（「典礼憲章7」）。⇒わたしたち人間が、感覚的なしるし（水、油、パンとぶどう酒、按手など）を用いて授けられる諸秘跡の恵みを受け、聖霊の働きによって聖なる者とされるということです。②§「そして、イエス・キリストの神秘体、すなわち、その頭と部分によって、完全な公的礼拝が果たされる（「典礼憲章7」）。⇒キリストを頭とし、聖霊によって、その体の部分（肢体）とされたわたしたち一人ひとりが、キリストの神秘体という教会全体として、父である神に完全な礼拝をささげることができるという意味です。③§「それゆえ、典礼祭儀はすべて、祭司キリストとそのからだである教会のわざであるので、他にまさる聖なる行為で（ある）」（「典礼憲章7」）。⇒したがって、典礼活動が、教会の三重の活動の中心に位置づけられるという考えが、第二バチカン公会議の教えです。

2024年度～2033年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

そのために、最初の三年間（2024年度～2026年度）、わたしたちは、教会の心臓部分とも言える典礼活動にスポットを当て、神への礼拝を大切に、神からの恵みを受け、聖霊に導かれ、キリストを中心にして歩む教会共同体のあり方について考えて行きたいと思えます。神からの恵みこそ、教会の「あたたかさ」（＝神の愛とつくしみ）が湧き出る泉なのです。ちょうど日本の教会においては、2022年11月27日から新しい「ミサの式次第」による典礼へと移行しました。この大きな転換に合わせて、それぞれの教会共同体において、典礼活動のあり方を振り返る機会にできればと思えます。

〔預言職〕（宣教活動）と〔牧職〕（司牧活動）

① § 「聖なる典礼は、教会の全活動を果たすものではない。人間は典礼に近づくことができる前に、信仰と回心へと召される必要がある。……教会は、唯一のまことの神とこの神がお遣わしになったイエス・キリストをすべての人が知り、悔い改めて自らの道から回心するために、信じていない人に救いの知らせを告げる」（「典礼憲章9」）。→これは、教会の宣教活動（預言職）のことを説明しています。② § 「また教会は、信じている人にもつねに信仰と悔い改めをのべ伝え、さらに諸秘跡にあずかる準備をさせ、キリストがお命じになったすべてのことを守るように教え、愛と敬虔と使徒職のあらゆる行いに彼らを招かなければならない。この行いによって、キリスト信者は、この世からの者ではないが世の光であり、人々の前で、人々の前で御父に栄光を帰する者であることが明らかにされる」（「典礼憲章9」）。→このテキストは、司牧活動を意味するものですが、それが最終的には、宣教活動につながっていることを教えています。

3-世界シノドスのテーマに合わせて

広島教区の「ともに歩むあたたかさのある教会をめざそう」という長期目標および中期目標は、2021年～2024年をかけて準備され開催された世界代表司教会議（世界シノドス）第16回通常総会の「ともに歩む教会のために一交わり、参加、そして宣教」というメインテーマを意識して設定されています。「交わり」とは、キリストと聖霊の働きを通して行われる神との交わりを通して行われる典礼活動を源泉としながら、教会共同体における相互の交わりへと発展して行くことを示すものです。また「参加」は、神からの恵みに支えられて、共同体のメンバーが自分にできることを意識し、共同体の使命のために奉仕することを意味しています。こうして、教会共同体の使命は、つねにすべての人を信仰と回心に導くために、福音を宣教することへ向かって行くこととなります。

そのために、教区の宣教司牧の三年毎の中間目標を、典礼活動、司牧活動、宣教活動という順序にしています。「典礼憲章」は、§ 「それにもかかわらず、典礼は教会活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る泉である。使徒的な活動が目指すところは、すべての人が信仰と洗礼を通して神の子となつて一つに集まり、教会の中で神を

2024 年度～2033 年度
広島教区の宣教司牧目標の解説

たたえ、いけにえにあずかって主の晩餐を食することにあるからである」（「典礼憲章 10」）と教えて、地上の典礼を通して、最終的な頂点が天上の典礼に連なることであることを強調しています。

結びに代えて

最後に、教区創立100周年（2023年）後の新たな歩みを開始したわたしたちが、神の民としてあかしをしながら、人々の救いのために奉仕することができるよう、聖母マリアの取り次ぎを願いましょう。

新しい福音宣教の星である聖母マリアよ、
あかしをもって輝くことができるよう助けてください。
交わり、奉仕、熱く惜しめない信仰、
正義、貧しい者への愛、そのあかしで、
福音の喜びを地の果てにまで届けるために。
そしてだれよりも、
その光の届かない隅にいることのないように。
いのちをもたらす福音の母よ、
小さき者の喜びの泉よ、
わたしたちのために祈ってください。
アーメン。

（『福音の喜び』（287）の結びより）



2024年4月
広島教区 司教 アレキシオ 白浜 満